

保育者のマスク着用が保育や子どもに与える影響

COVID-19による影響調査

Effects of Masks on childcare and children by COVID-19

七木田 方 美

NANAKIDA Masami

キーワード：子どもの保健・子どもの健康と安全・COVID-19 マスク

1. はじめに

COVID-19（新型コロナウイルス）感染防止対策として、マスク着用に効果を期待できることから、就学前施設における保育者も就学前児もマスクを着用する姿が多くみられるようになった。保育施設における保育者のマスク着用については、感染症予防対策という観点からみれば必要な対応であるが、子どもの健全な心身の発達を促す保育への影響について留意する必要がある。本研究では、東日本大震災における子どもの視力への影響が、被災後5年経過してから明らかになったことをふまえ¹⁾、COVID-19感染予防対策として子どもおよび保育者のマスク着用の提言について、その変容をまとめ、COVID-19禍におけるマスク着用の子ども及び保育施設における保育への影響について調査する。

2. 保育施設におけるマスク着用に関する記載の変容

(1) 2012年『保育所における感染症対策ガイドライン改訂版』（厚生労働省）²⁾

保育所で問題となる主な感染症とその対策について、「インフルエンザの飛沫感染対策として、可能な者は全員が咳エチケットを実行します。職員は、自分が感染しているとの自覚がないまま、園児たちと密着することが考えられるので、保育所内でインフルエンザ患者が発生している期間中は全員が勤務中はマスクを装着するよう心がけます。特に0歳児クラス、1歳児クラスを担当する職員は必ずマスクを装着します。園児にもマスクを装着できる年齢の場合は、保育所内でインフルエンザが流行している期間中はマスクを装着するように働きかけます。この場合、友達のマスクが可愛いと園児同士で交換することがないように注意します。また普段から咳やくしゃみの際には、飛沫を人に浴びせてはいけないということを指導します。」と記されていた。

(2) 2018年『保育所における感染症対策ガイドライン改訂版』（厚生労働省）³⁾

マスク着用は飛沫防止効果はあるが感染予防効果は高くはないという観点から、「保育所内でインフルエンザが疑われる事例が発生した場合には、速やかに医務室等の別室で保育するなど、他の子どもから隔離します。飛沫感染対策として、職員全員がマスク着用などの咳エチケットを行うとともに、マスクを着用できる年齢の子どもに対して、インフルエンザ流行期間中のマスク着用などの咳エチケットを実施するよう促すことが重要です。また、接触感染対策として、流行期間中は手洗い等の手指の衛生管理を励行することが重要です。」と記述し、0, 1歳児クラス担当者の「必ずマスクを着用する」という記述を削除した。

(3) 2020年3月『保育園における新型コロナウイルス感染症に関する手引き第1版』（日本小児感染症学会新型コロナウイルス感染症に関するワーキンググループ）⁴⁾

日本小児感染症学会は、園児や職員に対する感染予防対策を「保育所における感染症対応ガイドライン2018年改訂版（厚生労働省）」をもとに実施すると共に、「感冒症状などがあつたら、たとえ元気そうであっても登園を控えるように促しましょう。また、飛沫感染を防ぐために、咳・鼻水が少しでもある際には、可能な限りマスクを着用させてください。小さなお子さんで、マスク着用が難しい場合は、可能な範囲で、ティッシュペーパー等で鼻や口をカバーするといった咳エチケットを実施しましょう」と、積極的なマスク着用について記載した。

(4) 2020年5月『2歳未満児の子どもにマスクを使用するのはやめましょう』公益社団法人日本小児科医会⁵⁾

公益社団法人日本小児科医会は、2歳未満児のマスク使用をやめるよう提言した。提言の理由は次の4点である。

- ① 乳児のマスク使用ではとても心配なことがある。
- ② 乳児の呼吸器の空気の通り道は狭いので、マスクは呼吸をしにくくさせ、呼吸や心臓への負担になる。
- ③ マスクそのものや嘔吐物による窒息のリスクが高まる。
- ④ マスクによって熱がこもり熱中症のリスクが高まり、顔色や口唇色、表情の変化など、体調異変への気づきが遅れるなど乳児に対する影響が心配される。

併せて、世界の新型コロナウイルス小児感染症について心配は少ないことを、疫学的観点から次の4点を明記した。

- ① 子どもが感染することは少なく、ほとんどが同居する家族からの感染である。
- ② 子どもの重症例はきわめて少ない。
- ③ 学校、幼稚園や保育所におけるクラスター（集団）発生はほとんどない。
- ④ 感染した母親の妊娠・分娩でも母子ともに重症化の報告はなく、母子感染はまれである。

これらは、米国疾病予防管理センター（CDC）の新型コロナウイルス感染予防対策として、2歳以上の子どもが人と接するような外出をする場合にはマスク使用を薦めるが、2歳未満の子どもには窒息の恐れがあるため使用しないでください」という提言と、アメリカ小児科学会（AAP）の「2歳未満の子ども、とくに赤ちゃんのマスクは危険と警告している」ことを明記し、「CDCとAAPの警告に従って、アメリカのAmazonは0-3歳の子ども向けマスク広告を自社サイトから削除した」という提言を背景としていた。

(5) 2020年6月5日「Advice on the use of masks in the context of COVID-19 5 June 2020（COVID-19の制御に関わるマスク使用に関するアドバイス）」WHO（世界保健機構）暫定ガイダンス⁶⁾

WHOはCOVID-19感染を効果的に防止するために、公共交通機関、店舗、その他の限られた環境や混雑した環境など、物理的な距離が離れにくい場所では、政府が一般市民にマスクの着用を奨励する必要があるとアドバイスした。また、マスクは、物理的な距離、手指衛生、およびその他の公衆衛生対策の代わりにはならず、COVID-19との戦いにおける包括的なアプローチの一部としてのみ有益であることを示した。

(6) 2020年8月21日「Advice on the use of masks for children in the community in the context of COVID-19 Annex to the Advice on the use of masks in the context of COVID-19 (COVID-19に関連した 地域社会の子どもたちへのマスク使用に関するアドバイス COVID-19に関連したマスクの使用に関する助言の附属書)」WHO 暫定的ガイダンス⁷⁾

WHOは、子どもによるCOVID-19の伝染については、ほとんど分かっていないと認めた。一方で、10代の若者が大人と同じように他人に感染させることを示す証拠があるとして、12歳以上の子どももマスクを着用すべきとする指針を発表した。それぞれの国や地域で、大人に推奨されているものと同様の対策を取るよう勧告した。

また、子どもの最善の利益、健康、福祉を優先すべきであること、発達と学習の成果に悪影響を与えてはならないこと等により、5歳以下の幼児には通常、マスクを着けさせるべきではないとした。なお、6-11歳の子どものマスク使用については、地域における感染の広がりや、この年齢層における感染リスクに関する最新のエビデンス、高齢者と同居しているかどうかなどを考慮して判断することを求めた。

(7) 2020年12月1日「Mask use in the context of COVID-19 (Covid-19 禍でのマスク使用)」WHO (世界保健機構) 暫定的ガイダンス⁸⁾

WHOはCOVID-19の世界的な感染拡大を受け、マスク着用に関するガイドラインを強化した。感染が拡大している地域の医療施設や換気の悪い屋内などでは、12歳以上の学生を含め全ての人が常にマスクを着用すべきとした。また、屋外や換気の良い屋内でも物理的な距離が少なくとも1メートル確保できなければマスク着用が必要になるとした。また、あらゆる場面においてマスク着用に加え手洗いなど他の予防措置を実施すべきとした。感染拡大地の医療施設では、新型コロナ感染者以外の患者を看護する際も含め医療用マスクの「全般的な」着用を推奨した。新たなガイドラインは見舞い客や外来患者のほか、カフェテリアやスタッフルームなどの共通施設でも適用されることとした。一方、激しい運動をしていたり、喘息を持っていたりする場合はマスク着用に伴うリスクがあるとして着用を避けるよう要請した。ジムでは十分な換気や物理的距離、消毒を引き続き実施する必要があり、実施できなければ一時的な閉鎖を検討すべきとした。しかし、5歳以下の子どもについては、マスクを着用すべきではないという8月21日のガイダンスに変更はなかった。

3. 実態調査

(1) 調査対象

H県内の4地域で2020年7月11日から12月1日に実施された保育に関する研修会に参加した保育者及び保育施設従事者約200名を対象とした(正確な人数は不明)。アンケートは任意での回答とし、ウェブ上で回答を回収した。アンケートに回答した数は138名であった。勤続年数は3年未満42名、3年以上5年未満が31名、5年以上10年未満が42名、10年以上が23名であった。

(2) 手続き

①小児保健、保育保健に役立てることを目的とした実態調査であることを記載した用紙にて、調査協力を依頼した。

②回答は調査用紙に記載したURLより回答フォームにログインして行った。

③回答は任意であり、1人1回答となるよう、予め定められた番号の記載を求めた。

④番号から個人が特定されないこと、不利益を被ることがないことを用紙配布時に伝え、回答に関する質問については個別に応じた。

4. 結果

(1) 子どものマスク着用について、保育で気になることの有無

子どものマスク着用について、保育で気になることがあるかどうかを尋ねたところ、138名中135名の回答があった。「気になることがある」72名（53.3%）、「気になることはない」36名（26.7%）、「あったが解決した」16名（11.9%）「その他」11名（8.1%）であった（表1）。

表1 子どものマスク着用について、保育で気になることの有無
(n = 135)

気になることがある	72 (53.3%)
気になることはない	36 (26.7%)
あったが解決した	16 (11.9%)
その他	11 (8.1%)

(2) 保育者のマスク着用による子どもの変化

乳児クラスの子どもの変化について138名中138名の回答があった。「変化があると強く感じている」13名（9.4%）、「変化があると感じている」78名（56.5%）であり、変化があると感じている保育者は、65%以上であった。「変化はない」は31名（22.5%）であった。「その他」は16名（11.6%）であり、その内訳は、乳児との関わりが少ない、もしくは関わりがない保育者等であった（表2-1）。

全年齢における保育者のマスク着用による子どもの変化については、「反応が乏しくなった」87名（63.0%）であった（表2-2）。また、その他にも変化があったかという問いへの回答は表2-3に示した。

表2-1 乳児クラスの変化について (n = 138)

変化があると強く感じている	13 (9.4%)
変化があると感じている	78 (56.5%)
変化はない	31 (22.5%)
その他	16 (11.6%)

表2-2 保育者のマスク着用による子どもの変化 (n = 138)

反応が乏しくなった	87 (63.0%)
話したり歌ったりすることが減った	13 (9.4%)
人見知りしなくなった	5 (3.6%)
大人しくなった	7 (5.1%)
特になし	20 (14.5%)
わからない	6 (4.3%)

表 2-3 自由記述によるその他の子どもの変化（人数）

<p>ポジティブな反応 (10名)</p>	<p>目を見て話してくれるようになった (3) 保育士の目を見て感じてくれている (2) 表情や顔をじっとみつめる (3) アイコンタクトで伝わるが多くなった (2)</p>
<p>ネガティブな反応 (12名)</p>	<p>表情や声が伝わりにくい (4) マスクを取ってと手を伸ばしたり言ったりする (2) 顔が分からないので不安がったり泣くいたりする (2) 言葉かけで通じない (1) 話す人の方向が分からない (1) 言葉の発達によくないと感じる (1) トラブルが増えた (1)</p>

また、表 2-3 に示した内容について、具体的な自由記述を求めた。その中で、「食事に関する記述」「読み聞かせや歌といった活動に関する記述」「聴覚の発達に関わる記述」について以下に示す。

① 「食事」に関する記述

- ・マスク越しに「モグモグ」と言われても分からない。外してやった見せて、ようやく真似て口を動かす。
- ・保育者が噛んでいるところを見せないと あまり噛んで食事をしていないように思う。
- ・給食（離乳食）中、口の動きを見せてあげられないため、微笑み返しはするが丸飲みが改善されない。
- ・保育者のマスクを外そうとする。特におままごと遊びをしているときに、口に運びたいように外そうとしてくる。
- ・ままごと遊びの時に保育士にご飯を食べさせられなくて、マスクを下げたり、「違う！」と言ったりしていた。
- ・ままごと遊び中、食べているつもりややりとりが減少している。

② 「読み聞かせや歌等の活動」に関する記述

- ・絵本の読みきかせにおいて、マスク着用時の読み聞かせには興味を示さない子どもも、マスクを外して読み聞かせると興味を示し最後まで座って聴くことができる。
- ・歌を歌うときの反応や絵本の読み聞かせへの反応が減った。
- ・歌も絵本も口の動きが見えないので、真似て言葉を自ら発しようとする姿が少なくなったように思う。
- ・保育活動において歌をあまり歌わなくなった。
- ・声が聞き取りづらいため子どもが話に集中できない。
- ・朝の会での歌、手遊び、自由遊びでのおままごと、ふとした瞬間に目があつたときの共感や、やりとりで、今までは子どもたちの反応が良かったり、真似をすることが多かったり、声が出ていたり、笑顔での返事が返ってきたりしたが、特に先に述べた場面のやりとりでは反応が薄くなったように思う。

- ・「先生だよ！」と描いた絵にマスクがしてありました。目だけでしか表情が分からず、子どもにはこのように見えているのだと感じた。
 - ・マスク着用時には子どもがしゃべらなくなった。
- ③ 「聴覚の発達」に関わる記述
- ・聞き返される回数が増えた。
 - ・会話をしていくなかで聞き取りにくいことが多くなり、聞き返すことが増えている。
 - ・どの先生から呼ばれたのか分からず、キョロキョロする。
 - ・どの先生に呼ばれているのか、マスクで口が隠れているため、分かりにくそうにしている。

(3) 保育中のマスク着用による保育者の変化

保育中のマスク着用による保育者の変化について尋ねたところ、74名の回答があった。回答は複数回答とした。74名中、「声が大きくなった」54名(73.0%)、「近づいて話すようになった」30名(40.5%)、「保育室がうるさくなった」12名(16.2%)、「声が小さくなった」6名(8.1%)、「話すことが減った」4名(5.4%)、「保育者同士の意思疎通がしにくい」5名(6.8%)、「子どもの便に気づきにくくなった」1名(1.4%)という回答があった。

表3 保育中のマスク着用による保育者の変化 (n = 74)

声が大きくなった	54 (73.0%)
近づいて話すようになった	30 (40.5%)
保育室がうるさくなった	12 (16.2%)
声が小さくなった	6 (8.1%)

保育者自身の保育の変化について自由記述を求めたところ、保育活動で今までに利用していなかった機器の利用が増えたことの記述として、「オーバーアクションやカードやボードを利用しているの伝達も多くなってきた」「毎日の歌唱は控え、CDなどで音楽を聴くスタイルに変わってきている」とあった。また、子どもとの関わりにおいての変化は、「子どもに保育士の表情がわかりにくく、口で指示することが多くなっている」「子どもの視線になって言葉を渡すように心がけるようになった」「目の表情を豊かにするようになった」等の記述があった。保育者間のコミュニケーションにおいては、「保育者同士の表情による細かなコミュニケーションが取りにくい」「マスクは息苦しいので、手短で、簡単な内容になった」「何度も聞き返すことが増えた」等の記述が見られた。その他には、「感染症にかからなくなった」という記述が複数あった。

(4) マスク着用における園の方針の有無

保育者のマスク着用について、園として方針が決められているかどうかを尋ねたところ、138名中138名の回答があった。「決められている」103名(74.6%)、「決められているが運用は個人に任されている」26名(18.8%)、「決められていない」8名(5.8%)、「その他(フェイスシールド利用も選べる)」1名(0.8%)であった(表4)。

表4 マスク着用における園の方針の有無について (n = 138)

決められている	103 (74.6%)
決められているが運用は個人に任されている	26 (18.8%)
決められていない	8 (5.8%)
その他	1 (0.8%)

保育者のマスク着用の決まりは、「室内は基本的にマスク着用」「屋外では熱中症予防のためにマスクは外す」などの「場所」による決まりや、「保護者対応はマスク着用」「配膳時はマスク着用」など、「保育場面」による決まり、「4, 5歳では着用しない」「0歳児ではマウスガード」「0, 1歳児ではマスクは着用しない」といった「年齢」による決まり、「保育所・園内では保育所のマスクを着用し、通勤時のものは使用しない」「マスクの色は黒いもの使用しない」といった決まりがあったが、園ごとに決まりが異なり、試行錯誤の状態であることが伺えた。

(5) 日本小児科医会「2歳以下の子どもはマスク着用をしない」という提言の認知度

2歳以下の子どもはマスク着用をしないという日本小児科医会の提言を知っているかという問いに対しては、135件の回答が得られた。「理由も知っている」81名(60.0%)、「知っているが理由は知らない」34名(25.2%)、「知らない」18名(13.3%)、その他「詳しくは知らない」2名(1.5%)であった(表5)。

(6) WHO「5歳以下はマスクをしない」という提言の認知度

2020年8月21日にWHOが「5歳以下の幼児には通常、マスクを着けさせるべきではない」としたことを踏まえ、2020年8月25日以降の研修会にて質問をしたところ、78名の回答が得られた。「理由も知っている」21人(26.9%)、「知っているが理由は知らない」26人(33.3%)、「知らない」31名(39.7%)であった(表6)。

表5 2歳以下の子どもはマスク着用をしないという小児科医会の提言について (n = 135)

理由も知っている	81 (60.0%)
知っているが理由は知らない	34 (25.2%)
知らない	18 (13.3%)
その他 (詳しくは知らない)	2 (1.5%)

表6 WHOの5歳以下はマスクはしないという提言について (n = 78)

理由も知っている	21 (26.9%)
知っているが理由は知らない	26 (33.3%)
知らない	31 (39.7%)

5. 考察

(1) マスク着用における指針の変更に伴う保育現場の対応

厚生労働省は「保育所における感染症対策ガイドライン」において、2012年に感染力の高い飛沫感染の感染予防対策として特に0歳児クラス、1歳児クラスを担当する職員は必ずマスクを着用するとしていたが、マスクは移さないために着用するものであることから、2018年の改訂版では、

マスク着用などの咳エチケットを実施するよう促すことが重要であるとし、0, 1歳児クラスの担当者の「必ずマスクを着用する」という記述を削除した。しかし、COVID-19による感染拡大が懸念された2020年3月、日本小児感染症学会は「保育所における感染症対応ガイドライン（2018年改訂版）（厚生労働省）」をもとに実施すると共に、感冒等の症状が見られた場合は飛沫感染を防ぐため、マスクが着用できるのであれば、子どもも積極的にマスクを着用させることを記載した。そして2020年5月、日本小児科医会が米国疾病予防管理センター（CDC）およびアメリカ小児科学会（AAP）の提言に基づき、2歳未満の子どものマスク使用をやめることを提言した。この提言は、表5に示すように、85%以上の保育者が知っていることから、保育における子どものマスク着用がゆるやかになったことが伺える。しかしながら、2020年8月21日にWHOが「5歳以下の幼児には、通常、マスクを着けさせるべきではない」というガイドラインについては、日本においては提言に組み込まれていないことから、日本小児科医会の提言ほどに周知されていなかった。なお、COVID-19第1波を、最も早く収束させたモンテネグロでは、早急に5歳以下のマスク着用は不要とし、併せて6歳以上の子ども及び成人は、公共の場所（電車やスーパー等）でのマスク着用を義務付け、違反者には罰則があったことを述べておく。

（2）保育者のマスク着用については、園の方針について

保育者のマスク着用については、園の方針が定められている、もしくは定められているが個人の運用に任せられているという「ゆるやかなルール」を設けている園を合わせると9割を超えていた。

2012年度版「保育所における感染症ガイドライン」において、「0, 1歳児クラス担当者は必ずマスクを着用する」という記載がされたにもかかわらず、2014年の西館の調査では⁹⁾、75%の保育施設が保育者のマスク着用について「園の方針が定められていない」と回答していたことと比較すると、COVID-19感染予防に関する対策として、マスク着用ルールが保育施設において積極的に進められたことがわかる。

（3）保育者のマスク着用における乳児の変化

保育においてマスク着用による子どもへの影響について、乳児クラスにおいて「変化があると強く感じている」「変化があると感じている」とした保育者は65%以上であった。また、乳児に限らず、「子どもの反応が乏しくなった」と感じている保育者が63%おり、他にも「話したり歌ったりすることが減った」「大人しくなった」「人見知りしない」等の変化を感じている保育者が多数いた。乳児は、言葉に限らず、感覚を総動員して相手の感情にあわせて体を動かしたり、口を動かしたり、声を出したりするエンタテインメント（引き込み現象）をもっている¹⁰⁾。しかしながら、保育者がよく動く口をマスクで覆うということは、日常的に生じていた自然なエンタテインメントが生じにくくなっていることが考えられる。

自由記述に見られた保育者のマスク着用による保育者の「気づき」は、乳幼児期に最も発達する神経系の発達と関連する内容が含まれていた。特に「食事」と「聴覚」に関する記述には注目すべきである。「食事」は咀嚼嚥下機能の発達および発音とも関連するため、子どもの誤嚥や言葉の発達の遅れといった問題が生じる可能性が考えられる。「聴覚」に関する音の定位や声の選別が難しそうだという記述からは、子どもが身を守るということが困難になるのではないかと心配が生じる。また、「読み聞かせや歌といった活動」に関する記述には、言葉を使い覚えることへの影響を懸念する。今後とも、保育者および保護者と連携しながら継続調査し、丁寧に分析を進める必要がある。

(4) 保育中のマスク使用による幼児の変化

COVID-19 感染予防において、ソーシャルディスタンス保持の工夫が望まれる中、保育中のマスク使用により、「声が大きくなった」「近づいて話すようになった」と答えた保育者が多数いた。年長児には言葉で伝えることが増え、かつマスクをしている園児もいるため、マスク着用による意思疎通が、保育室の音環境をも変化させていることが推測できる。また近づいて話すというのは本末転倒である。

子どもが主体的に活動しているとき、保育室は静かで子どもの声ははっきりと聞こえるものである。4, 5 歳児における保育者と子どものマスク着用は、時と場合を選べば、子ども主体の保育へと転換させるための道具になるかもしれない。

【引用文献】

- 1) 東日本大震災における子どもの心のケアに関する報告書；宮城県子ども総合センター：2016. p14 (<https://www.pref.miyagi.jp/uploaded/attachment/356072.pdf>) 閲覧日 2020.12. 5
- 2) 保育所における感染症対策ガイドライン（2012年改訂版）厚生労働省：2012.11 P23 (<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/pdf/hoiku02.pdf>) 閲覧日 2020.12. 5
- 3) 保育所における感染症対策ガイドライン（2018年改訂版）厚生労働省：2018.3 p8 (<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyouku/0000201596.pdf>) 閲覧日 2020.12. 5
- 4) 保育園における新型コロナウイルス感染症に関する手引き第1版（小児感染症学会新型コロナウイルス感染症に関するワーキンググループ）2020年3月 (http://www.jspid.jp/news/2003_covid19_1.pdf) 閲覧日 2020.12. 5
- 5) 「2歳未満児の子どもにマスクを使用するのはやめましょう」公益社団法人日本小児科医会 2020.5 (https://www.jpaweb.org/dcms_media/other/2saimiman_qanda20200609.pdf) 閲覧日 2020.12. 5
- 6) World Health Organization. Advice on the use of masks in the context of COVID-19 :Interim guidance;5 June 2020. (https://apps.who.int/iris/bitstream/handle/10665/332293/WHO-2019-nCov-IPC_Masks-2020.4-eng.pdf) 閲覧日 2020.12. 5
- 7) World Health Organization. Coronavirus disease (COVID-19): Children and masks; 21 August 2020. (<https://www.who.int/news-room/q-a-detail/q-a-children-and-masks-related-to-covid-19>) 閲覧日 2020.12. 5
- 8) World Health Organization. Mask use in the context of COVID-19: Interim guidance; 1 December 2020, (<https://apps.who.int/iris/handle/10665/337199?show=full>) 閲覧日 2020.12. 5
- 9) 西館有沙. マスク着用が保育に及ぼす影響に関する保育者の認識. 富山大学人間発達科学部紀要 第10巻第2号. 2016: 125-130
- 10) 七木田方美. エンタテインメント. 比治山大学短期大学部幼児教育研究会和顔愛語. 第47巻. 2018: 15-16